
スケジュール帳は時を止める

green age

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スケジュール帳は時を止める

【Nコード】

N0034G

【作者名】

green age

【あらすじ】

昔から配置の変わらない私の部屋の本棚に、数年前から無くした宝物が眠っている。否、無くしたのでない。それは密かに待っていたのだ。数年が経ち、私が再びそれを見つけることを、忘れていたあの日と思い出すことを。

昔から配置の変わらない私の部屋の本棚に、数年前から無くした宝物が眠っている。否、無くしたのでない。それは密かに待っていたのだ。数年が経ち、私が再びそれを見つけることを、忘れていたあの日を思い出すことを。

仕事で使うためのちょっとした資料を取り出すために、私は朝から大掃除の騒ぎで本を探っていた。大中小問わず積み上げられた本の塔が其処此処に点在するのを、私は巨人兵になった思いで崩し、ぐりと囲まれた本棚の上下左右、指の腹に感じる様々な背表紙の感触をなぞりながらお目当ての本を探す。

読書好きな父親の影響もあってか、私は幼い頃からの本好きで、高校生になるまでは父親がふらりと買い集める本を片っ端から読み進めていたのだが、大学生になり、社会人になり、それなりに収入を得た今、一度本屋に寄ってしまったえば何の種類を問わず、つまりは形振り構わず大量の本を買い集めてしまう。腕いっぱい本を抱える私を、友達は「変な性癖があるのね」と笑うが、確かに『性癖』と言えばそれも正しいと思う。本屋に入り、あの膨大な数の四角い形が積み重なり、棚に収まっているのを見て、背表紙の色とりどりを見て、古臭い、またはまだ新しいインクの香りを嗅ぐと、どうにも胸の奥からむらむらと購入意欲が湧き、気づけば腕にひとつ、またひとつと本が積み重なっていく。

読むものもあれば、読まないものもある。小説もあれば、図鑑もあるし、辞書もある。ただ本という形が私の周りに集まるのが好きだ。字面が並ぶ紙が何百と綴じられ、色のついた表紙にすっぽりと収まり、それだけならシンプルであるのに、一旦それを開いてしまえば現実とは別世界へと連れて行かれる。そう、現実から逃げる場所が

あるならば、それが続く扉はシンプルな方がいい。

ふと見慣れたタイトルを見つけた。それはもう色が黄色に変色した古い一冊の本。元は白色のカバーだったのだろう、赤というよりも真紅で書かれたタイトル、父親が昔好きだった本だ。私が中学生の頃だったかな、父親が初めて「これは面白いぞ」と薦めてくれた恋愛小説。当時私はSF小説にはまっていて、今更恋愛小説なんてと鼻にかけて思っていたのに、読んでみると至極あっさりとその世界観にはまってしまった思い出の一冊。

懐かしいな、と思いながらそれを取り出してみる。本と本の間から取り出されるそれは長い封印を解かれていくような重々しさをもちながら、だけど長い間固定位置にいたからこそ調和が乱れてしまうような、手にしっくりと馴染む本の厚さを久しぶりに、あの頃よりも年月が経った手に感じながら。

それをすっぽりと抜き出すと、途端にそこが空洞になり、両隣の本は支えが無くなってバランスを崩した。そしてその空洞の奥で、何かがぱたんと倒れる音が聞こえた。

あれ？と思ってその空洞の中へ手を入れると、何か薄い本の感触がある。狭い空洞に手を掻い潜らせながらそれを引っ張りあげると、それは茶色いカバーのついた薄いスケジュール帳であった。抜き出したこの本に支えられていたのだろう、何気なしにこの本を手にとったからこそ見つかったのが運のツキである。

それを見たところで何かあるわけでもないだろうに、私は背後から誰かに脅かされないように二、三回後ろを振り返る。

手のひらか少しはみ出るくらいの大きさ、そういえばこのシンプルな茶色の表紙をいつか買った覚えがある。だけど中身は蓋が錆付いてしまったようにひとつも思い出せない。確かに私のものであるという確証はあるのだけど――びっくり箱を覗くように恐る恐る、ゆっくりと表紙をめくってみれば、中からいきなり飛び出した一枚の

紙切れ。本当にびっくり箱からばねの玩具が飛び出したように心臓が跳ね上がって、しかしそんな私の心臓と裏腹にひらりひらりと緩やかに舞い落ちていく紙切れに、私は立ち尽くしたままそれが床に落ちるまでの経路を見届ける。

それを手にとって、ふと気付いた。

……—写真だ。

シンプルな表紙を覆すような鮮やかな色彩に目を瞬かせると、目を丸くした。そこに映るのは二人の男女。微妙な距離を保ちながらカメラを見る幼い瞳、表情。背景は緑の木々の景色、濃い若草の新緑、夏に近い季節だ。

私と、その隣に立っているのはあいつ。

私は少し俯いて照れ笑いをしていて、あいつは微かな笑顔を表情に浮かべて突っ立っていた。

この写真を手にとった瞬間から、時を遡ってこの日の記憶が蘇る。私の回りに穴があき、私はその穴にすっぽりと落ちていってしまう。遡っていく記憶はずっと真っ暗だ。思い出は私の脳のどこか、それこそ私の部屋の本棚みたいところで山積みになっているから、それ個人だけでは引っぱりだすことが出来ないのだ。しかしその行き着く先がどこかを私の記憶の断片は知っている、そこへ寄り道もせずに連れて行ってくれる。今の今まで私はすっかり忘れていたが、写真と記憶が一本に結びついて、あの夏の日、あのむせ返る午後へと手をひいていく。

——確かこの日は、大学のサークルの合宿の帰りで、何気なしに車を止めたのがきっかけだった。

この年はちょっと羽を伸ばそうと毎年行く場所と違う場所を合宿地にしたから、初めての場所に行くにも運転は長期戦で大変だったし、合宿中も勝手が違うから、部員全員いつもの倍疲れる思いをしている

た。部員は女子3名と男子2名という小さなサークルだったけど、和気藹々としていて、サークルというよりも仲良しグループと言った方がわかりやすい。だけど今回、皆仲が良すぎるというのが少し仇になってしまったなあとは思った。まとめ役がいらないとなると、どうしてもなあなあになってしまうのがオチになってしまうからだ。そのなあなあ具合が余計に皆の気持ちを萎えさせ、合宿中は皆が皆とも元気を無くし、夏の暑さまでもが私たちの体力を奪った。しかしそれはそれ、これはこれ、と帰りの車では皆いつもの調子を取り戻していた。来年は元の合宿地に戻そうね、と苦笑いしながら、ラジオから流れる音楽に体を揺らし、歌い、馬鹿話をしては盛り上がっていた。

途中、車から降りて外の空気を吸おうというひとりの意見はすぐに可決されて、そこから数分、車は来た道では見かけなかった所に止まった。

「ここどこ？」

「なんか自然がいっぱいだね」

真っ先に降りたのは部員の一番若いメンバーの女子ふたり、それに続いて助手席に乗っていた男子が「次は運転変わりますね」と運転席の男子に告げ、続いて降りた。車に残るのはこのサークルの最年長メンバーである私と、運転手である同じく最年長メンバーである男であった。名前は敦志。私は彼を『あつくん』と呼んでいた。

「あつくん、疲れたでしょう？」

「楽しいから別に疲れたりはしなかったよ」

「そう、じゃあ外の空気でも吸いに行こうよ」

私たちは二人で車を降り、今まで走らせていた道路の片隅のどこにこんな木々を隠していたのだろうかというくらい濃い真緑の木々の

中へと潜り込んでいった。

あつくんは大学一年生のときに、このサークルで知り合った。私とあつくんは学科も違うし、校舎も一番離れているくらい遠い関係であつたから、一週間に一度のサークル以外では会う機会がなかった。だけどそれもまた人の出会いの面白さであるなあといい、あつくんにそれを告げると、あつくんは「俺もそう思った」と笑顔で返してくれたことを思い出す。

あつくんは、私が今まで出会った人々の中でも特に不思議な人だつた。一言で言えば『聞き役』に徹した人間だろうと思う。だからあんまり自分のことは話さないし、寡黙であるし、いつも相手の話を聞いて相槌を打っているところしか見たことがない。背がひよろつと高く、目はリスみたいに丸っこくて、なのに猫背で、常に顔は俯いている。でもふとしたときに見る、その手の大きさ、煙草を持つ指の長さ、車を運転する器用な手さばきに「男の子なんだなあ」と強く引き付けられる人でもあつた。

あつくんと私はたったふたりだけの同期だったから、特に仲が良いというのもあつた。蓋を開いて中身を見ればほとんど私の話を聞いてもらっていただけなのだろうけど、たまにあつくんもぽつりぽつりと自分のことを話したりもした。

あつくんが話す中で一番驚いたのはホストクラブで一ヶ月だけ働いたことがあるということだ。それを聞いたとき、私はあまりの驚きに目が転げ落ちる思いがした。喋り下手で、女の子と特に関わりうという気もなさそうなあつくんがまさかホストクラブだなんて、と私は驚きに身振り手振りしながら言っていたのだけれど、あつくんは一言、「出来ないからこそやってみたくて」と平然と言ったりする。意外と大胆で、行動力のあるあつくんのぼんやりとしている横顔が妙に輝かしく見えてきて、そんな目をする私を見てあつくんは付けたしのように言う、「楽しかったよ。やっぱり話すことが苦手

なこともよくわかったけど」

他にも、恋愛で悩んでいる人があつくんに相談を聞いてもらいに来たら、あつくんはしばらく押し黙って、「普通こうして慰めるだろう」というマニュアルを無視した角度から意見を述べたりする。それは恋愛に限らず、何にしても、あつくんは意外とマニュアル通りに思考を固めない主義であることを私の尺度で知った。それが嫌だと泣いた先輩も後輩も見たことがあるけれど、あつくんのやること、言うことは日頃が寡黙な分、言っていることに芯が通っているのがわかる。その人が全力で幸せになるために、たまにきつい意見を述べてでも、その人の軌道修正に徹する姿勢がとても誠実であるとよく見える。

あつくんが胸の内に何億と秘めている言葉や思いが全部、私たち周りの人間に少しずつ少しずつ注がれている優しさを私は見つけた。シンプルな表紙にカラフルな世界を詰め込む四角い形。言葉を取捨選択しながら、私たちを道の上にきちんと乗せて進ませていく感触。「あつくんは本みたいだなだね」

私の言葉に、あつくんはその時に初めて戸惑う顔を見せたのを覚えている。

数時間、大量の荷物と一緒に車に詰め込まれていたから、数時間ぶりに思い切り腕を伸ばし、肺の奥まで吸いこむ空気が美味しい。体の奥からいろんなものを拾い上げて、吐き出す。少しだけひんやりとした空気が喉を通して全身に行き渡り、体の奥も唸るように大きく呼吸をし、体内の血液をまた勢いよく巡らせる。意識的に呼吸を行うことがとても気持ちよく感じことも滅多にない。自然の中に体を預けることはとても体を楽しむ。都会で生きていれば尚更、便利と楽は少し違う。

それでもまた慌ただしい毎日を過ごすための、ほんの少しの骨休め

——私はまた思い切り背伸びをした。
ふと、その途中で視線を感じ、行為を止める。隣を見ればあつくんが私を見ている。

「……何？」

「…いや」

あつくんは嬉しいのか切ないのか曖昧な顔をして、私の目から視線を無理やり外しながら「何でもない」と付け加えた。あつくんの声は低く、大きい方でもない。だから人ごみや騒がしい場所ではあつくんの声は聞き取りづらいときがあるけれど、こんなに静かな、木々に囲まれている場所であるとどんな些細な声でも聞こえる。あつくんの息遣いや、もしかしたら心の内までもが透かして聞こえるかもしれないと思った。

そうして気付く、こうして二人きりになったのも久しぶりのことだ。

「何かあるんじゃないの？」

「何もない」

「言ってよ？大丈夫？」

あつくんの肩を叩く。こんな些細なこと、今までだって何度でもあったのに。酔った勢いで腕に絡みついたこともあるし、みんなて手を繋いだときも隣にいたよね？なのにどうしてだろう、触れたあつくんの肩が思った以上に熱かったから？それともあつくんの長い睫毛が一瞬小さく揺れたのが見えたからだろうか。

互いの間に急速な緊張感が訪れた。私は叩いた右手を引っ込める。あつくんはそのまま歩を進め、私はあつくんの背中を追いかけるように歩み始める。私の足が空気を読んでいるようにぎくしゃくと動いているのがわかる。あつくんの猫背から見え隠れするものが、いつもは気付かない「それ」が形作られていく。その異様な空気は独

特なもので、「鈍い」わけではない私は何となく気付いてしまった。もう少し鈍感な自分だったらよかったのに。私はただひたすらそんなフリをするしかない。

空を見上げれば、木々の間から白く落ちる木漏れ日、その隙間を埋め尽くすように薄く広がる青い空。私たちの間の微妙な空気をもみ消すかのように、優しくそれを包み込む。

「……ねえ」

あつくんが唐突に止まり、振り向いたその動きであつくんの手のひらと私の手のひらが掠った。一瞬過ぎたあつくんの手の温もり、手を繋いだんじゃない、ただ掠っただけ。だけど張り詰めた糸の中で生まれた小さな摩擦に、思わず驚いた拍子に目を丸くしてあつくんを見上げる。あつくんは私の顔に驚いたのか私を見返す。

——互いに見合ったその間抜け面は、記憶の糸を辿るだけでは上手く思い出せない。でも確かに私はその瞬間、胸の奥の、ずっと奥にあるいくつか積み重なった箱の中の一番綺麗な箱の蓋が開いて、そこから飛び出した胸を焦がすような熱気が私の血液を一瞬で沸騰させた。

長かったなあ、その言葉はひた隠しにしてきた自分の心が発した声。窮屈な箱の中で身を縮めたていた年月から飛び出し、やっと開放されたから。私の中であつくんはとっくの昔から「友達」の枠を越えていたように思う。

木々を通り抜け、私たちの髪を揺らし、何かを取り払うように過ぎ去った夏風は、言葉のない私たちを代弁するかのようにやけに心地がよかった。思わず顔を背けて吹き出す私たちを、体温のような生暖かい空気が包む。

……— そうだ、その時の写真だ。

あの後、後ろを追ってきた後輩たちに写真を撮られたのだ。そして出来上がってすぐ、その当時買ったばかりのスケジュール帳に写真をしまい込んだ。夏始まりの珍しいスケジュール帳はまだ使い始めたばかりで、そしてあの日から予定を止めたままだ。あの日、18日にはご丁寧に丸まで囲ってある。そして写真を間に挟んだまま、私はこの本棚の奥にこのスケジュール帳をしまった。父親が好きだったこの本を目印にして。

いつか思い出すことを願っていたわけでもなく、ただあの日のまま時を止めてしまいたかった。時間は進んでいく、だから、過去に足踏みしてるわけにはいかない。私たちには進まなきゃいけない未来があるから。

使いかけの、まだ真っ白なスケジュール帳に昔の想いを馳せながら。幼い二人の表情に、あの頃のあの時間はもう二度と戻ってこないと嘆いてしまいたいそう。ただひとつ変わらないのは、今も君が私の隣にいてくれるということ。

いつも手のひらに触れているものは、触れていないときのことを忘れてしまうことがある。夏の暑さに冬の寒さを毎度忘れてしまうように、涙が枯れるまで泣いた日々があったとしても、いつかそれも思い出になるように。

過去の私は、その忘れてしまいがちな第一步を踏み留めていたのかな？

積み重ねた本の塔を背もたれに、窓から差し込む太陽の光に目を細めた。まだ太陽は高い位置にある。床に出来た窓の影がゆっくりと、地球の自転と共に動いていく。カレンダーを見ると日付は今日、ちようど「18」を示していた。

「誕生日おめでとう」

長い付き合いの中で、初めて送った記念日のメールに、あつくんはきつと首を傾げるだろう。遠まわしに、だけど始めの第一步を踏み

締めたあの日から今日までの多大なる感謝の気持ちを込めて。
数分後、あっくんからメールが返ってきた。いつもは「Re:..」の
続くタイトルを珍しく消して。

「今日18日か。おめでとう」

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0034g/>

スケジュール帳は時を止める

2010年10月30日09時42分発行